「法然上人絵伝」雑感

若杉準治

昭和五十六年七月、京都国立博物館の研究員となったとき、私に与えられたのは「絵巻・大和絵」の分野の担当ということであった。それまで学生時代から、前職の京都府教育庁文化財保護課技師であった期間を通じて、仏像を中心とした彫刻に主たる関心を抱いていたことをご承知での担当分野の指定であった。同年四月、京都国立博物館は「京都文化資料研究センター」を発足させたばかりで、調査事業の充実を企図しており、文化財保護課での技師としての経験をそこで生かしてほしいということと、京都国立博物館の研究員がそれぞれ独自の分野を担当するという伝統のからみで、当時彫刻担当には伊東史朗氏がおられ、そして仏教絵画と絵巻・大和絵を中野玄三氏が一人で担当していたという事情から、その一部を分割して担当することになったものであった。

文化財保護課での仕事の中で、美術工芸品全般を担当していたとはいえ、絵巻は触れる機会の少ないものであり、いくぶん不安はあったが、新しい分野への挑戦に魅力を感じ始めていた。配属された資料調査研究室の室長は切畑健氏であり、絵巻に造詣が深い同氏の指導を得たことで、この上ないスタートをきることができた。また、絵巻研究の大家であった梅津次郎先生が歩いて五分の所にお住まいで、また白畑よし先生もよく館を訪れられ、お話をうかがうことができたのも心強い事であった。その頃の私は、とにかく絵巻の作品そのものを見ることが重要であると考え、日々、博物館に収蔵されている館蔵品、寄託品の一つずつ調査することに専念していた。

そうした中、翌昭和五十七年は、法然（尊称を略す）が誕生した長承二年（一一一二）から八百五十年にあたるということで、記念事業として、知恩院所蔵の四十八巻からなる国宝・法然上人絵伝の展覧会の開催がすでに決定されていて、その実施が私の初めての大きな仕事となった。本格的に絵巻の勉強を始めたばかりで、絵巻の大展覧会を担当するというのは大変なことではあったが、法然という高僧の伝記を主題とする絵巻ということで、仏教美術を主に学んだ者にとっては比較的なじみやすく、それで絵巻の勉強ができたことは、出発点としては幸いであった。こうして、法然上人絵伝との長いつきあいが始まった。

「法然上人絵伝」というのは、国宝の指定名称で、知恩院本は外題に「法然上人行状絵図」と記されており、また幾種類もある同主

題の絵巻と区別するために、その巻数から「四十八巻伝」と呼ばれることもあり、以下その名で呼ぶが、さらにこれが後伏見上皇の勅命で制作されたという伝承から「勅修御伝」の名もある。

特別展覧会「知恩院と法然上人絵伝」では、四十八巻伝の全巻を同時展示することと、知恩院の名宝を紹介するという二部構成になっていた。この展覧会は、特別展覧会「釈迦信仰と清涼寺」と同時開催であったため、会場は明治建築の本館（現、特別展示館）の第七～十室の四室と、今は取り壊されてしまったが、当時新館と呼ばれていた展示館の二階とになった。そして壁付ケースのほか、のぞきケースを駆使して、出来るだけ広く絵巻を広げることを念頭に展示が行われた。しかし、なにぶんケースの長さには制約があり、また四十八巻を同時に展示するということで、全画面を展示することは望むべくもなかった。そこで、それを補う意味もあって、図録にはすべての画面を掲載することになった。そのために全巻の写真を改めて撮影したのだが、それによって短期間で十分とはいえないものの全画面を概観できたことは大きな収穫であった。図版はモノクロであったが（すでに中央公論社の続日本絵巻大成で全巻のカラー図版は刊行されていた）、一部の長大画面を除いて画面を切らずに掲載していること、そして各画面に百字の場面解説を付して説話内容が理解できるように配慮したことが大きな特色である。この図録はこれ以後私の座右の書となった。

この展覧会を機に法然上人絵伝について、研究を深めようとして文部省の科学研究費の交付を受けて、諸本の調査を行い、またその成果を含めて昭和五十九年には「高僧伝絵」という特別陳列を企画して、法然だけでなくひろく高僧伝絵を集めて展示した。この展示で、法然上人絵伝の諸本を多く集め、資料化できたことも大きな収穫であった。

こうした恵まれた環境で始めた法然上人絵伝の研究であったが、自身の研究の深まりはなかなか遅々とした歩みになってしまった。一つには、絵巻全体を把握しなければならないという焦燥の中に埋没したことがある。そのために、先の「高僧伝絵」の特別陳列に続いて、昭和六十二年春に特別展覧会「絵巻」を開催して、国宝に指定されている絵巻を中心に名品を集め、時代様式の変遷を辿るというコンセプトで展覧会を開催し、その後もいくつかの特別展、特別陳列を開催したのだが、法然上人絵伝に専念することからは離れる結果になった。またつねに収蔵庫に四十八巻があるという安心感も大きく作用していたと思う。

その間、四十八巻伝は、現在では詞書の写本だけが残っている九巻伝を解体し、その絵だけを取り出して再構成したものという、島田修二郎先生の魅力的な説に導かれて、現存する詞書と四十八巻伝の絵とで九巻伝の復元を試みたり、四十八巻伝の模本に関する紹介を執筆したりと関連する研究を発表し、また展示される機会ごとに解説を執筆し、諸本の説話の比較や図様に関する資料の収集は続けているが、まとまった成果に結実することはなかった。

そうしたなか、平成二十三年（二〇一一）が法然の八百回の遠忌の年にあたるということで、さまざまな企画が持ち上がってきた。その一つは法然に関する展覧会を実施するということで、四十八巻伝を日常的に管理している私が担当をすることになった。法然に関する直接資料は少なく、展覧会を構成するには工夫が必要だったが、私は四十八巻伝を軸に法然の生涯をたどることを基本的な枠組みと

して『法然〜生涯と美術〜』を企画し、そのなかで、法然没後の帰依者の信仰の姿として制作された法然の伝絵について、絵巻形式、掛幅形式双方の典型的な作品を集めてみた。そのことによって、諸本研究がまだまだ途上であり、特に、掛幅絵伝については、基礎資料の集成も十分でなく、未解明の点が多く残っていることをあらためて感じさせられた。

一方、浄土宗側の企画として、四十八巻伝のデジタル化（絵伝全体の高精細デジタル画像を作成保存すること）が企画された。これは絵伝の詞書と絵を一紙ずつ撮影することから始められ、一巻の撮影に二時間半を要すという大変なもので、撮影だけで延べ十七日間を費やした。そして完成した画像の活用方法が検討され、その一つとして「絵伝研究会」が組織された。これについては、私が以前から構想していた学際研究の試みとして、異なる分野の研究者が、同じ画面を見てそれぞれの立場から意見交換をするという形式で、そのために原本の四倍（面積で十六倍）の画像を用意したのだが、そこでデジタル画像の効用が発揮された。デジタル化されたことによる新たな発見ということはないが、閲覧や表示、画面上での相互比較などにおいて、デジタルデータの効用は大きなものがあると思う。

昭和五十六年からの三十年間、ずっと四十八巻伝のそばにいて、その間の主な出来事はこうしたことであったが、先にも述べたように「研究」としてまとめることがいまだにできていない。その要因の一つは、現存諸本の性格付けの難しさである。四十八巻伝は知恩院本が初稿本とほぼ断定できるのだが、そのほかの伝本は、原本が現存せず、いずれも写本のみであり、原本の内容をどの程度伝えているのかが明らかでなく、写本同士の関係、伝本間の関係が明瞭でないのである。現段階では、伝法絵を最初の法然上人絵伝とし、そこから琳阿本、弘願本が成立し、浄土真宗の側で拾遺古徳伝が制作され、また宗門とは異なる場で増上寺本が制作されたと考えている。そして法然の百年忌を迎える時期に四十八巻伝が制作されたという状況が想定できる。こうした漠然とした成立と展開のイメージをより確実なものとすべく諸本資料を整理しているというのが現状である。

法然上人絵伝の総合的な研究については今後続けていくこととして、ここで四十八巻伝に関して気になっている、しかし結論の出せないいくつかのことについていささか述べてみたい。

その一つは、四十八巻の構成の原理に関することである。四十八巻という構成は、撰者とされる舜昌が『述懐抄』で述べているように、『無量寿経』に説く法蔵菩薩の四十八大願に基づくものだが、その巻立てについて何らかの原理が存在するのか、もし存在するとすれば、それは何か、編纂の意図はどのようなものであったのかという問題である。

一般に高僧伝は誕生から示寂までの生涯を編年的に構成するのが通例で、法然上人絵伝でも、法然の生涯のなかには時期の不明な事蹟が多く、それをどの位置に配置するかによって諸本に構成の差があるものの、基本的に編年体となっている。ところが、四十八巻伝の場合は、紀伝体に近い構成になっており、法然の著作や消息に見られる思想を述べた部分や、帰依者や諸弟子の伝記の体裁を取っている巻もあり、その構成はより複雑である。これはどのような構成原理に基づくものだろうか。

そのことを考えていくためには、まず各巻がどのような主題を

持っているかということを明らかにしておかなければならない。さらに細かく言えば、各段の主題の検討が必要になる。そして主題はしばしば書き出しの文言によって推考することが可能である場合も少なくない。そこでそれを見たのが別表である。

これによって四十八巻の概要を見ると、まず巻一から巻六までの六巻には、ほぼ編年的に、誕生前後から浄土の教えを説き始めるまでの前半生を述べている。そして巻七で論調を変え、「修行おほくその証を得給き」として、法然の修行のなかで起こった奇跡的事項を列挙している。これは巻七から八の二巻にわたり、法華三昧で普賢菩薩が出現したことや、夢に善導が現れて法然の布教を称賛したこと、月輪殿で頭に光輪を、足下に蓮華を生じたこと、さらに諸人が法然の超人性を夢に見たことなどが挙げられている。

巻九は、

上人道心うちに薫じ、行業ほかにあらはる。かみ王公より、しも黎元にいたるまで、その徳に帰せずといふことなかりき。

という小序を置いて帰依者の列伝を始める。まず巻九は一巻を通じて、源空が導師を勤めた後白河法皇の如法経供養に関する話でしめられ、続く巻十は高倉、後白河、後鳥羽三代の帰依を述べている。そして巻第十一・十二は公家で、特に巻十一には九条兼実に一巻が費やされ、巻十二には大炊御門経宗や藤原隆信などの帰依の様子が語られる。さらに巻十三からは僧侶との関係に話が移り、巻十三には静恵親王、静厳、師の叡空などが取り上げられ、巻十四以降は一巻に一人の伝を述べる巻が続く。まず巻十四には顕真、巻十五に慈円、巻十六に明遍、巻十七に聖覚となっている。そして巻十八には法然の著述である『選択集』、『往生大要抄』、『大経釈』の大意を述べる。

巻十九、二十は再び帰依者の逸話で、冒頭の九条兼実夫人のほかは、阿波介、尼聖如房、教阿、随蓮、作仏房など、さほど有名でない人物のほか、さらに個人名を明らかにしない、浄土の法門を学する住山者や仁和寺の尼という人が採りあげられている。

続く巻二十一から巻二十四には、法然が折に触れて行った法話や問答、質問に対する消息などが採りあげられる。

巻二十五からは三たび帰依者の逸話で、今度は関東の武家が採りあげられる。すなわち、北条政子、大胡隆義、弥次郎入道、甘糟忠綱、宇都宮頼綱、薗田成家、北条時頼とつづき、巻二十七と二十八は、それぞれ一巻を割いて熊谷直実と津戸為守の伝に宛てられる。そして巻二十九は門下から一念義を称える者が出てきたことに対して、これを停止させる法然の意志を説く。巻三十は統一したテーマが見られず、出家の師である皇円が遠州桜が池で蛇に身を変えて弥勒の出世を待ったという話、浄心房が口では偉そうにしていながら末期に乱れた話、そして第三段からは東大寺を焼いた平重衡の帰依、東大寺復興の大勧進に法然の推挙で重源が当たったこと、再建中の大仏殿で法然が浄土五祖像等の供養を行ったことという大仏再建にまつわる話を収め、最後の第六段には法然の和歌十七首を収めている。

巻三十一からは法然の後半生、特に念仏停止から配流に至る法難が主題となる。比叡山の念仏停止の強訴に対し、法然が弟子を諫める七箇条の起請文を作成したこと、しかしながら念仏に対する攻撃はやまなかったこと、そして巻三十二は一段のみで、法然の陳述書を掲げている。巻三十三は、後鳥羽院の女官の出家を直接の契機として、弟子の安楽、住蓮が死罪となり、その罪に連座する形で法然

が土佐へ配流となったことが述べられ、巻三十四は配流の旅で、鳥羽、摂津経島、播磨高砂、室泊へと西下し、巻三十五で塩飽へ寄ったあと、兼実の配慮で土佐から変更になった配所である讃岐での状況が語られる。そして巻三十六では、赦免されたものの入京が許されず、摂津勝尾寺への滞在が語られたのち、ようやく帰洛に至る旅が述べられる。

巻三十七には、帰洛の翌年正月の病気から二十五日の臨終に至る経過が語られる。そして巻三十八は、諸人が法然の臨終前後に感じた夢の物語や法然の墓所に関することが語られ、巻三十九には初七日から七七日に至る中陰供養の次第、そして巻四十、巻四十一は、かつて法然を批判しながら後に悔いた僧の逸話で、公胤、明恵、静遍を巻四十で、そして巻四十一は明禅に一巻をあてている。巻四十二は、いわゆる「嘉禄の法難」が主題で、比叡山の衆徒によって、法然の墓所が荒らされるということがあり、門弟達が協議して、法然の遺骸を掘り出し、結局粟生で荼毘に付し、二尊院に遺骨を納める雁塔が築かれるまでをあらわしている。

巻四十三の冒頭には

上人の勧化本願のむねにかなふゆへに、かのおしへにしたがふもの、往生をとげたる事、在世といひ、滅後といひ、都鄙のあひだ、そのかずをしらず、筆墨も記しがたし。しかりといへども、法流をひろむる遺弟より、慈訓をまもる道俗にいたるまで、まのあたり面受したてまつれるにかぎりて、旧記にのせ、口実にそなふるところ、あつめてその行状をしるす。けだし上人化導の徳とするにたれるゆへなり。

という小序が添えられ、以降は諸弟子の列伝となっている。巻四十三には信空、心寂、湛空、信寂房、宗源の伝を一段ずつに述べ、巻四十四は前五段に隆寛伝を、最後の一段を円照伝にあて、巻四十五は、源智、禅勝房、重源の伝を各一段に述べる。そして巻四十六と巻四十七は、それぞれ一巻を費やして弁長と証空の伝にあてている。最後の巻四十八は前四段を空阿弥陀仏の伝とし、以降に念仏房、感西、金光房の伝を各一段で述べ、最終段は結文とする。

やや煩瑣に渡ったが、以上が四十八巻伝の巻次ごとの内容である。こうしてみていくとき、文中にも示唆したが、漠然とながらいくつかのまとまりを持って構成されているように見える。

諸弟子列伝を述べる六巻に小序が添えられ、巻四十八の最終段の結文が

上人の門弟そのかず侍しなかに、宿老のよにしられたるをえらびてその行状をしるしおはりぬ

とあって、これが四十八巻全体の結びでなく、諸弟子列伝の結文であることは、この六巻が独立したまとまりであることをよく示している。

これが最終の六巻をなしていること、また首部の六巻が前半生を述べ、次の巻との間に断絶があることから、構成に六巻というまとまりを意識しているのではないかということが想定される。四十八巻のもととなった法蔵菩薩の四十八大願はしばしば六八の誓願という言われ方をすることを考えると、それが構成法のヒントになったことは考えられないだろうか。

その視点から、上述の構成を再見すると、

一～六　誕生から浄土開宗にいたる前半生

七・八　奇跡の物語

九～十二　仰徳の人々　天皇・公家
十三～十七　同時代の僧侶
十八　法然著述大意
十九・二十　帰依者列伝
二十一～二十四　法然法語
二十五～二十八　関東の武家
二十九　一念義停止
三十　東大寺勧進
三十一～三十二　念仏停止
三十三～三十六　配流
三十七　往生
三十八　墓所
三十九　中陰法要
四十～四十一　批判者たち
四十二　嘉禄の法難
四十三～四十八　諸弟子列伝

となる。ここでわかるように、単純に六巻がそれぞれ一つのテーマで括られるわけではないものの、六巻で括ったときの先頭となる巻一、七、十三、十九、二十五、三十一、三十七、四十三では、それぞれ話題が転換されていることが見られる。

それぞれの六巻にまとめると、前半生、行徳の人々（公家編）、行徳の人々（僧侶編）、法然の法話（帰依者に対して）、行徳の人々（武家編）、後半生（念仏の停止から配流）、往生と没後の出来事、諸弟子列伝という形に括ることが出来る。これを基本として、奇跡の物語や一念義停止のこと、さらに東大寺再建を含む巻三十など、括りきれない部分を適宜収めているのではないだろうか。

それ以前に成立した伝絵の編年体とは異なる構成を意図し、かつ四十八巻という大部な編成を整えるに際し、何らかの構想があったと考えたとき、六巻の八セットということが一つの原理として存在した可能性があるのではないだろうか。

四十八巻伝について考えている問題の次の一つは、四十八巻伝成立の背景、編纂者の立場に関することである。

先述のように、四十八巻伝の巻第四十三以降は諸弟子の列伝となっている。そのなかで四十八巻伝の撰者は、二祖弁長と西山派証空を別格として一巻を当て、ほかに隆寛と空阿を重視している。逆に法然の一周忌を主催したと見られている源智については一段を当てるのみで、周忌法要のことも記されない。こうした扱いからこの絵伝が従来言われているように弁長系の人々によって制作されたことが想定される。

このことについて、四十八巻伝の、弁長に関する説話叙述の内容と形からもう少し考えてみたい。その一は、弁長が『選択集』を見せられたということである。『選択集』は、帰依者であった九条兼実の依頼により撰述したもので、法然の主著ともいうべきものである。この『選択集』は法然在世時にはごく限られた弟子にしか閲覧を許されなかったと伝え、閲覧を許されると言うことは弟子として高く評価されたことを意味する。したがって、絵伝のなかにそのことが明記することは制作者にとっては重要な関心事であったと考えられる。

このことについて、四十八巻伝では、隆寛へ渡したことが巻四十四第二段に、そして聖光房への付属を巻四十六第一段に述べている。

このうち、隆寛へ渡したことは最も成立の早い伝法絵の段階で、

権律師隆寛小松殿参向の時、上人御堂の後戸に出対給て、一巻の書を持て、隆律師の胸間に指入。依月輪殿之仰、所撰撰択集也。

とあり、隆寛が法然の滞在していた小松殿に参ったとき、法然は御堂の後戸で出迎え、『選択集』を隆寛の胸の間に差し入れたことを述べている。この逸話は、琳阿本巻六第四段、弘願本の知恩院所蔵の一巻の第二段にもほぼ同内容で採られている。また弁長への付属も琳阿本の巻五第五段に、法然が聖光房に対し、「汝は法器の仁也。我立するところ此書をうつしてよろしく末代にひろむべし」と言ったという形で記している。

ところが、拾遺古徳伝は、隆寛、弁長への付属には一切触れず、巻六第四段で親鸞が法然から『選択集』の書写を許されたこと、そして書写ののち、題字の下に法然が自ら「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」の句を書き添えたことを記している。拾遺古徳伝は、常陸門徒の依頼により、従来の法然上人絵伝に漏れていることを拾遺して制作したもの、もっと端的に言えば、法然の後継者としての親鸞の立場を明確にするために、それに関する逸話を増補して制作されたものであり、そのことは、この一点に明瞭に示されている。

そう考えるとき、四十八巻伝が弁長への付属を記すところには、制作者の立場が反映している可能性がある。確かに弁長への選択集付属はすでに琳阿本にも記されているところではあるが、注意すべきは、四十八巻伝でのこの逸話を記す形である。弁長への付属を述べているのは、巻四十六の第一段であるが、この段にはまず、弁長が最初天台を学び、故郷筑前で寺の学頭となるものの、無常を感じて名利を捨て法然の室に参じ、法然の説く三種の念仏が解脱の道と理解して法然に随侍したことを述べている。これに続けて

翌年建久九年の春上人選択集を聖光房にさづけらるとして、選択付属の逸話が記される。この部分は第三紙の冒頭にあたるが、第二紙からの接続が少し不自然で、上の一文を記す第一行目の右に僅かな余白があり、自然な書き継ぎではなく、別に記したものを、後に挿入したような状態になっている（挿図1）。すなわち、すでに整えられていた第一段の逸話と絵との間に弁長への選択付属の逸話が追加されているよ

挿図1

うに見えるのである。この部分の筆者は前半部分と同筆であるので、その挿入の時期は原本制作時ではあるのだが、当初なかったものを、あえて立場を補強するために行ったことが考えられ、この文言が琳阿本に近いことから、制作の途中でその記述をもとに追加した可能性がある。

先述したように、弁長伝に一巻を割いていることから弁長重視の姿勢は明らかであるのだが、選択付属の逸話を敢えて挿入していることに法の継承をより明確にする意識が働いていると考えられる。そして、弁長伝の末尾（巻四十六第五段）には、弁長が法然の門流のなかに異論を唱える者が多いことを嘆いて『念仏往生門』を著したとき、源智がこれを評価したこと、また文永の比、弁長の弟子の然阿弥陀仏と源智の弟子の蓮寂房とが両流を校合したところ全く違うところはなかったので、蓮寂房は以後弁長の鎮西義に依ることにしたことを述べていることも、この絵伝の制作が弁長系の人々によって、それも源智系の人々との融和を意識しながらなされたことを示している。

ここで採りあげる三つ目の話題は、四十八巻伝の制作期間の問題である。このことについては、江戸時代の初めに洛東法然院の忍澂が著した『御伝縁起』に、後伏見上皇の命で舜昌が撰述し、徳治二年（一三〇七）から十数年をかけて制作したと記されている。これが何に基づいているのかは明らかではなく、時代を隔てた記録であり必ずしも事実を伝えているとは言い難い。しかしながら、現存の四十八巻伝の画風から見て、おおむねこの時期に制作が始められたと考えて、大きな矛盾はない。ただ、島田修二郎氏が明らかにしたように、四十八巻伝は、それ以前に制作されていた九巻伝を解体して、その絵を再用して制作された可能性が高く、画風としてはいくぶん遡るものが含まれている。しかしながらこれが再編されたのが制作の開始ということになるのであり、徳治二年を認めるか否かは別にして、十四世紀初頭に、制作が開始されたと見ること自体には問題がないだろう。

問題は、完成時期である。これについては、『存覚袖日記』のなかに、詞書料紙の紙数書き上げがあることから貞治年中（一三六二～六八）には完成していたと

挿図２

する見方があり、ほぼ五十年という期間から考えて、常識的にも完成を想定することには問題がないように思われる。ところが現存の図のなかには、この制作時期の幅の中に収めることを躊躇させる画風が存在する。そのひとつが、巻二十の第三段である（挿図2）。

この段は、熊野参詣の際の示現に導かれて法然の教導に帰して念仏行者となった遠江の作仏房が、帰国ののち、市で染め物を売って暮らしていたが、臨終に際し、自ら鉦を打ち、念仏のうちに往生したという逸話を描いている。絵はその往生の場面で、室内の須弥壇の前に作仏房が合掌して坐し、右に尼と僧、西の縁に二人の僧、手前の縁に白衣の侍が坐し、庭にも腰の曲がった老僧が子どもの肩に手を置いて庵室に向かい、その後ろに童子と侍が続いている。その左に小柴垣があり、その上空に瑞雲がたなびき、往生を示している。

ここに描かれる作仏房の庵室の形態に一種異様な感がある。一般に絵巻の構図法には、建物を辺の側から見て描く画法、すなわち一方向を水平線で描き、これに直行する方向を斜線で描いて立体表現をとる画法と、建物を角から見て描く画法、すなわち両方向ともが斜線であらわされる構図のいずれかによっている（一部仏堂などに正面観であらわされる場合がある）が、この建物はこの二つの画法の合体した歪んだ空間となっている。建物の手前の縁や明障子は水平線であらわされ、それに対し、建物の左辺が左上がりの斜線で奥行きをあらわし、檜皮葺の屋根もこれに対応している。ところが、建物の奥側、すなわち雪松の描かれた杉戸絵と板縁は、手前の縁と平行になるべきところ、そうならずに、右上がりの斜線で構成されている。そのために作仏房のいる部屋はいびつな形になっているのである。

こうした構図による建物表現は、室町時代にはしばしば見られるものであるが、これがいつ頃から見られるのか、それが四十八巻伝制作の下限を考える上で重要なポイントの一つであると考えている。このことを少し見ておきたい。

現存する絵巻でこうした構図法は十五世紀以降のものと考えられるのだが、先の制作期間を認めるならば、十四世紀の宮廷絵師を中心とした大和絵の正統的な画家集団のなかにすでにこうした構図法が存在したことになる。しかし、現存遺品から見る限り、これは認めがたいことである。というのは十四世紀の年記のある作品、ないしその時代の作と推定される作品には全くその図法は見られず、また、異なる画派の六人の絵師の合作になる応永二十四年（一四一七）に完成した清涼寺本融通念仏縁起のなかにもそれは見出せないからで

挿図3

ある。こうした構図法を見せる最初の例と見られるのは、制作年は特定できないものの、詞を後崇光院（一三七二～一四五六）が執筆、絵を土佐広周が描いたことから十五世紀半ばの制作と見られる天稚彦絵巻（ベルリン東洋美術館蔵）である。この第二段に描かれる、渡り廊下でつながった建物の片方は、水平線と右上がりの斜線で構成され、もう一つの建物は二本の斜線で構成されている。しかし、これにしても一棟でなく、長い渡り廊下でつながれた二棟なので、一図とはいえさほど違和感はない。一棟でこの構図法で描かれ、制作年を明らかにするのは、天文五年（一五三六）の日蓮聖人註画讃（京都・本圀寺蔵）まで降る（挿図3）。ここに見られる歪みはかなり進行しているので、これ以前にある程度前段階を想定できるが、さほど遡るものではあるまい。そう考えるとき、こうした構図法で描かれた行状絵図の図を十四世紀前半までの枠に収めることには無理があるように思われる。もちろん、改作、後補の可能性も考えるべきかもしれないが、制作事情には、まだまだ検討が求められると考えられるのである。

以上、思いつくままに雑感を綴ってきたが、四十八巻伝をはじめとする法然上人絵伝の世界は豊穣であり、解明されていないことが多く残されている。遅々とした歩みになるが、今後もその謎の解明へ向かっていきたいと思っている。

巻の内容	段ごとの内容	書き出しの文言
1 総序	1 総序	夫以我本師釈迦如来は、あまねく流浪三界の…
前半生の伝記（幼時）	懐妊夢想	抑上人は、美作国久米の南條稲岡庄の人なり…
	2 誕生	つゐに崇徳院の御宇、長承二年四月七日午の…
	3 竹馬遊戯	所生の小児、字を勢至と号す。…
	4 定明夜討	かの時国は、先祖をたづぬるに、仁明天皇の…
	5 時国逝去	時国ふかき疵をかうふりて死門にのそむとき…
2 〃（出郷）	1 定明往生	定明遂電のゝち、隠居の心しつかにして…
	2 入観覚門	当国に菩提寺といふ山寺あり。…
	3 訣別生母	観覚小児の器量を見るに、いかにも…
	4 邂逅忠通	童子十五歳近衛院御宇久安三年春二月…
3 〃（出家・隠道）	1 登叡山	童子入洛のゝち、まつ観覚得業が状を…
	2 到源光房	独木かけはしあやうく、九花いろめつらし…
	3 転付皇円	同年十一月八日、華髪をそり法衣を着し、…
	4 出家受戒	この児の器量ともからにすきて名誉ありせは…
	5 学六十巻	ある時、「すてに出家の本意をとけ侍ぬ。…
	6 師事叡空	恵解天然にして、秀逸のきこえあり。…
4 〃（諸師歴訪）	1 戒体論諍	上人黒谷に蟄居のゝちは、…
	2 参籠清涼寺	保元々年上人二十四のとし、…
	3 蔵俊問答	上人その性俊にして大巻の文なれとも、…
	4 寛雅問答	醍醐に三論宗の先達あり。権律師寛雅…
	5 慶雅問答	仁和寺に華厳宗の名匠あり。大納言法橋慶雅…
	6 御室招請	上人諸宗に通達し給へること、…
5 〃	1 法然法語	上人のたまはく学問ははしめて見たつるは…
	2 弘法大師夢想	建仁二年九月十九日談議のとき上人かたりて…
	3 中川実範伝戒	上人はもと天台の真言をならひ給へり…
	4 成覚房問答	上人智恵第一のほまれちまたにみち…
	5 証真称美	あるとき上人月輪殿にして山僧と参会の事…
	6 静厳弟子来問	上人の老後に竹林房の静厳法印の弟子きたりて…
6 〃（浄土宗興行）	1 帰一向念仏	上人聖道諸宗の教門にあきらかなりしかは…
	2 観称論諍	あるとき上人往生の業には称名にすきたる…
	3 移居吉水	上人一向専修の身となり給にしかは…
	4 専修念仏所依	或時上人おほせられていはく…
	5 専修念仏	上人の念仏七万遍になされてのちは…
	6 浄土宗興行	上人或時かたりてのたまはくわれ浄土宗を…
	7 二通宣旨	上人播磨の信寂房におほせられけるは…
	8 五祖影将来	震旦に浄土の法門をのふる人師おほしと…
7 奇跡の数々	1 法華三昧	上人た、諸宗の教門にあきらかなるのみに…
	2 青龍守護	上人黒谷にして花厳経を講し給けるに…
	3 上西門院説戒	上西門院ふかく上人に帰しましまして…
	4 密観成就	上人秘密の窓にいり観念の床に坐し給しに…
	5 善導来現	上人ある夜夢見らく。一の大山あり…

8 〃	6 三昧現前	上人専修正行としをかさね一心専念こうつもり…
	1 眼光照経	上人三昧発得のゝちは暗夜に燈燭なしといへとも…
	身光満室	又ある時更たけ夜しつかにして深窓に人なし…
	2 一丈勢至来現	あるとき上人念仏しておはしけるに勢至菩薩来現…
	3 三尊化現	上人あからさまに草庵をたちいて、かへり…
	4 霊山寺念仏	ところどころに別時念仏を修し不断の称名を…
	5 歩空放光	同年四月五日上人月輪殿にまいり給て…
	6 念珠放光	ある人、上人の念珠を給はりてよるひる…
	7 勝法房写真	上人の弟子勝法房は絵をかく仁なりけるか…
	8 諸人夢想	諸人感夢の事おほきなかに或人は…
9 仰徳の人々	1 序	上人道心うちに薫し行業ほかにあらはる…
天皇＝後白河院	後白河院如法経	後白河法皇河東押小路の仙洞にて御如法経を修し…
	2 如法経料紙迎	九月四日御料帋をむかへらる…
	3 如法経書写	同八日写経の水をむかへらる…
	4 十種供養	同十二日巳刻に御書写ことおへしかは…
	5 奉納御幸	同十三日御経奉納のために首楞厳院に臨幸あり…
	6 御経供養	中堂より還御食堂にして御装束をあらためらる…
10 〃＝高倉院	1 高倉院受戒	高倉院御在位のとき承安五年の春勅請あり…
後白河院	2 後白河院受戒	後白河法皇勅請ありけれは上人法住寺の御所に…
	隆信写影	…御信仰のあまり右京権大夫隆信朝臣におほせて…
	3 後白河院崩御	後白河の法皇ひとへに上人の勧化に帰しましまし…
	4 引導寺念仏	法皇崩御の後かの御菩提の御ために…
	5 後白河院13年忌	後白河の法皇の十三年の御遠忌に当て…
後鳥羽院	6 後鳥羽院	後鳥羽院度々勅請ありて円戒を御伝受…
11 〃	1 法性寺殿仏事	諸人の帰依あさからさりしなかに九條関白殿下…
公家＝九条兼実	2 月輪殿御息所	月輪殿をつくられけるに例もなき屋を一宇…
	3 大納言僧都	或時上人月輪殿へ参し給へるに…
	4 造選択集	建久八年上人いさゝかなやみ給事有けり…
	5 兼実宿契	殿下の御帰依あさからすして上人参たまふごとに…
	6 兼実入道	殿下ひとへに念仏門に入給にしのちは…
12 〃（公家）	1 経宗	大炊御門左大臣〈経宗公〉所労の時…
	経宗往生	花山院右大臣〈兼雅公〉はふかく上人に帰し…
	2 兼雅	右京権大夫隆信朝臣はふかく上人に帰し…
	兼雅往生	卿二品の弟民部卿範光は後鳥羽院の寵臣なり…
	3 隆信	大宮の内府〈実宗公〉は帰敬の心さし他にことに…
	隆信往生	野宮左大臣〈公継公〉は師弟の契あさからさるに…
	4 範光	聖護院の無品親王〈静恵〉御違例のとき…
	範光往生	延暦寺東塔竹林房の静厳法印吉水の禅房に…
	5 実宗	上人清水寺にして説戒のついでに…
	実宗往生	南都興福寺の古年童は上人清水寺にて説戒のとき…
	6 公継	建仁二年三月十六日上人かたりてのたまはく…
	公継往生	左衛門の志藤原宗貞ならひに妻室惟宗の氏女…
13 〃（僧侶）	1 静恵	
	聖護院往生	
	2 静厳	
	静厳参問	
	3	
	清水寺説戒	
	4 古年童	
	古年童往生	
	5 叡空	
	師匠帰依	
	6 藤原宗貞	
	引接寺供養	

巻の内容	段ごとの内容	書き出しの文言
14 顕真伝	1 顕真求法	天台座主権僧正顕真いまた大僧都におはせし…
	2 大原談義	其後八ヶ年の歳暦をすきて寿永二年九月に…
	3 顕真消息	法印道心うちにもよをして出離の要路をもとめ…
	4 五坊建立	法印一の大願をたてゝいはくこの寺に五坊を…
	5 顕真往生	其後三千の衆徒をして挙申によりて…
15 慈円伝	1 慈円帰信	慈鎮和尚は法性寺殿の御息…
	2 日吉西方懺法	本願の旨趣をとふらひ極楽の往生をのそみ…
	3 四天王寺絵堂	四天王寺の別当に補任せられし時は…
	4 良快受法	月輪の禅閤の御息妙香院の僧正良快は…
16 明遍伝	1 明遍遁世	高野の僧都明遍は少納言通憲の子なり…
	2 四天王寺夢想	僧都上人所造の選択集を披覧して…
	3 明遍来問	上人天王寺におはしけるとき…
	4 念仏数遍	その後は僧都ふかく上人に帰し…
	5 明遍往生	僧都ひとへに上人の勧化を仰信し…
17 聖覚伝	1 聖覚弘通	安居院の法印聖覚は入道少納言通憲の孫子…
	2 法然癈病	元久二年八月に上人癈病をわつらひ給事ありけり…
	3 但馬宮	法印ひとへに上人の勧化を信伏して…
	4 法然忌聖覚説法	上人の第三年の御忌にあたりて御追善のために…
	5 聖覚往生	かの法印一山の明匠四海の導師として…
	6 明円夢想	上野国の国府に明円といふ僧侍りき…
18 法然著述大意	1 選択集大意	上人製作の選択集は月輪殿の仰によりて…
	2 往生大要抄	同製作の往生大要抄に云至誠心といは…
	3 大経釈	上人大経を尺給とき四十八願の中の第卅五の…
19 帰依者列伝	1 兼実夫人帰依	月輪の禅閤の御帰依あさからさりしかは北政所も…
	2 阿波介念仏	阿波介といふ陰陽師上人に給仕して…
	3 東大寺棟木	上人かたりての給はく浄土の法門を学する住山者…
	4 聖如往生	尼聖如房はふかく上人の化導に帰し…
	5 仁和寺尼	仁和寺にすみける尼上人にまいりて申やう…
20 〃	1 教阿往生	河内国に天野の四郎とて強盗の張本なるもの…
	2 随連往生	沙弥随蓮は上人配所へおもむき給し時御とも申て…
	3 作仏房往生	遠江国久野の作仏房といひし山臥は…
21 法然法語	1 法然常語	上人つねに仰られける御詞…
	2 一紙小消息	又一紙にのせての給はく末代の衆生を往生極楽の…
	3 念仏行者心得	上人念仏の行者の心得へき様をおしへ給へる事…
22 〃	1 法然消息	或人上人の勧化に帰してのち安心起行のやう…
	2 往生用心	またある人往生の用心につきておほつかなき…
23 〃	1 往生用心	或人往生の用心につきて条々の不審を尋申たり…
	2 鎮西修行者	鎮西より上洛せる修行者上人の庵室に参して…
24 〃	1 阿弥陀経説	上人の給はく阿弥陀経はたゝ念仏往生はかりを…
	2 諸宗祖師往生	上人の給はく諸宗の祖師はみな極楽に生し給へり…

	3 諸弟子問答	或時聖光房法力房安楽房侍けるに安楽房上人に尋…
	4 女人来問	元久二年正月廿一日尋常なる尼女房たちあまた…
	5 法然消息	法性寺の左京大夫信実朝臣の伯母なりける女房…
	6 妙真尼往生	伊豆国走湯山に妙真といふ尼ありき…
25 関東武家帰依	1 二位禅尼帰依	勧化上都にさかりにして道徳辺鄙にをよひしかは…
	2 大胡消息	上野国の御家人大胡の小四郎隆義在京の時吉水の…
	3 弥次郎入道往生	武蔵国那河郡の住人弥次郎入道は上人の教誡を…
26 〃	1 甘糟忠綱	武蔵国の御家人猪俣党に甘糟の太郎忠綱といふ…
	2 宇都宮往生	宇都宮の弥三郎頼綱家子郎従済々として武蔵野を…
	3 薗田成家往生	上野国の御家人薗田の太郎成家の将軍…
	4 時頼往生	西明寺の禅門若冠の時はつねに念仏の安心なと…
27 〃（熊谷直実）	1 熊谷入道推参	武蔵国の御家人熊谷の次郎直実は平家追討のとき…
	2 熊谷入道願文	蓮生念仏往生の信心決定してのちはひとへに…
	3 法然返報	蓮生行住坐臥不背西方の文をふかく信しけるにや…
	4 兼実問状	蓮生か往生うたかひあるましきよし或は仏の告を…
	5 熊谷入道往生	建永元年八月に蓮生は明年二月八日往生すへし…
28 〃（津戸為守）	1 津戸消息	武蔵国の御家人津の戸の三郎為守は生年十八歳に…
	2 念仏安堵	津の戸の三郎上人の門弟浄勝房唯願房等の僧衆…
	3 津戸為守往生	為守ふかく上人の勧化を信しひとへに極楽の往生…
29 一念義停止	1 幸西擯出	比叡山西塔の南谷に鐘下房の少輔とて聡敏の…
	2 基親問状	兵部卿三位基親卿ふかく上人勧進のむねを信して…
	3 法然返報	上人御返事云仰旨謹奉候畢御信をとらしめ給やう…
	4 光明房宛返報	成覚房の弟子等越後国にして一念義をたてけるを…
	5 停止起請文	光明房の状につきて上人一念義停止の起請文を…
30 後半生の伝記（念仏停止）	1 皇円成蛇身	上人の師範功徳院の肥後阿闍梨皇円は叡山杉生…
	2 浄心房虚仮	妙覚寺に浄心房とてさかしきひしりありき…
	3 重衡帰依	治承四年十二月廿八日本三位中将重衡卿父平相国…
	4 東大寺勧進	東大寺造営のために大勧進のひしりの沙汰侍ける…
	5 五祖影等供養	寿永元暦のころ源平のみたれによりて命を都鄙に…
	6 法然歌詠	上人やまとうたを事とし給はさりけれとも我国の…
31	1 念仏停止強訴	上人の勧化一朝にみち四海にをよふしかるに…
	2 七箇条起請文	上人この事を聞給てすゝみては衆徒の鬱陶を…
	3 兼実書状	月輪殿この事を歎給て座主大僧正に進せらるゝ…
	4 興福寺強訴	其後興福寺の鬱陶猶やまず同二年九月に蜂起を…
32 〃（陳述書）	1 法然弁状	専修念仏の事南都北嶺の鬱淘につきて上人…
33 後半生の伝記（法然流罪）	1 安楽房死罪	かくて南都北嶺の訴訟次第にとゝまり専修念仏の…
	2 法然配罪	罪悪生死のたくひ愚癡暗鈍のともから…
	3 法然誨徒	門弟等なけきあへるなかに法蓮房申されけるは…
	4 兼実泣別	官人小松谷の御房にむかひていそき配所へうつり…

34	後半生の伝記（西下の旅）	1 配途出発	三月十六日に花洛をいて、夷境におもむき給に…
		2 鳥羽乗船	鳥羽のみなみの門より川船にのりてくたりたまふ
		3 経ノ島	摂津国経の嶋につき給にけりかのしまは平相国…
		4 高砂浦	播磨国高砂の浦につき給に人おほく結縁しける…
		5 室泊	同国室の泊につき給に小船一艘ちかつききたる…
35	後半生の伝記（讃岐配所）	1 着西忍館	三月廿六日讃岐国塩飽の地頭駿河権守高階保遠…
		2 住生福寺在国化導	讃岐国子松庄におちつき給にけり当庄の内生福寺…
		3 兼実往生	上人左遷ののち月輪の禅閤朝暮の御なけき…
		4 津戸為守宛書状	上人流刑のよし遠近にきこえしかは津戸三郎為守…
		5 直聖房夢想	直聖房といふ僧ありき上人の弟子となりて…
		6 善通寺参詣	上人在国のあひた国中霊験の地巡礼し給ふなかに…
36	後半生の伝記（赦免帰洛）	1 召還宣下	月輪殿のおほせをかるゝ趣をもて光親卿たひたひ…
		2 逗留押部	上人勅免にあつかり給て国をいて、のほり給ふに…
		3 勝尾寺臨時念仏	恩免ありといへともなを洛中の往還を…
		4 一切経施入讃歎	当寺に一切経ましまさゝるよしをきゝ給て上人…
		5 帰洛	勝尾寺の隠居もすてに四箇年になりぬ花洛の往還…
		6 安住大谷	慈鎮和尚の御沙汰として大谷の禅房に居住せしめ…
37	老病・往生	1 老病	建暦二年正月二日より上人日来不食の所労増気し…
		2 十一日高声念仏	十一日の辰時に上人をき居給て高声念仏し給…
		3 拝見仏真身	同日の巳時に弟子等三尺の弥陀の像をむかへ…
		4 紫雲出現	廿日の巳時に坊のうへに紫雲そひくなかに…
		5 往生	廿三日よりは上人の御念仏あるひは半時あるひは…
		6 知恩院御影	武蔵国の御家人桑原左衛門入道と申けるもの…
38	法然墓所	1 諸人夢想	参議兼隆卿七八年のさきにゆめみらく…
		2 墓所兆識	上人の住坊のひむかしの岸のうへに西はれたる…
		3 堀河太郎入道	四条堀河に林木を売買して世をわたるものあり…
39	中陰仏事	1 中陰仏事初七日	上人臨終のとき遺言のむねあり孝養のために…
		2 二七日	二七日 導師求仏房 檀那別当入道孫
		3 三七日	三七日 導師住真房 檀那正信房湛空 誦経物…
		4 四七日	四七日 導師法蓮房 檀那良清かの諷誦の文云…
		5 五七日	五七日 導師権律師隆寛 檀那勢観房源智 かの…
		6 六七日	六七日 導師法印聖覚 檀那慈鎮和尚 かの諷誦の…
		7 七七日	七々日 導師三井僧正公胤 檀那法蓮房信空かの…
40	批判者後悔	1 公胤往生	上人かたりての給はくわれ一向専念の義を…
		2 明恵後悔	栂尾の明恵上人摧邪輪三巻を記して選択集を破す…
		3 静遍往生	禅林寺の大納言僧都静遍は池の大納言頼盛卿の息…
41	〃	1 明禅帰信	毘沙門堂の法印明禅は参議成頼卿の息…
		2 明禅消息	かの法印は天台の宗匠なりしかとも選択集を披覧…
		3 明禅往生	法印風癇にをかされ病悩日月をゝくるといへとん…
42	嘉禄の法難	1 衆徒蜂起	上人の没後順徳院の御宇建保後堀河院の御宇貞応…
		2 西仏追賊	つゐに　勅許ありしかは嘉禄三年六月廿二日…

		3 改葬	その夜法蓮房覚阿弥陀仏等妙香院の僧正の禅室に…
		4 護送遺骸	西郊にわたしたてまつるに路次の障難をゝそれて…
		5 再移来迎房	嵯峨にわたしをきたてまつりて在所を隠密すへき…
		6 茶毘	翌年正月廿五日の暁更に西山の粟生野の…
		7 収骨造塔	遺骨をひろひ宝瓶にをさめたてまつり…
43	諸弟子列伝	1 序	上人の勧化、本願のむねにかなふゆへに、…
		2 信空伝	白川の法蓮房信空は、中納言顕時卿の孫、…
		3 心寂伝	西仙房心寂は、もと叡空上人の弟子なりけるが…
		3 湛空伝	嵯峨の正信房湛空は、徳大寺の左大臣の孫…
		4 信寂房伝	播磨国朝日山の信寂房は、上人面授の弟子なり…
		5 宗源伝	醍醐の乗願房宗源は、上人につかへ…
44	〃	1 隆寛伝	長楽寺の律師隆寛は、粟田の関白五代の後胤…
		2 選択集附与	上人、小松殿の御堂におはしましけるとき…
		3 隆寛配流	並榎の竪者定昭か凶害によりて、山門に…
		4 隆寛往生	律師をは森の入道西阿うけ給はりて東関へ…
		5 朝直往生	律師、鎌倉をたちて飯山へくたり給しとき…
		6 円照伝	遊蓮房円照は、入道少納言通憲の子…
45	〃	1 源智伝	勢観房源智は、備中守師盛朝臣の子…
		2 禅勝房伝	遠江国蓮華寺の禅勝房は、天台宗を修学し…
		3 重源伝	俊乗房重源は、上の醍醐の禅徒にて…
46	〃	1 弁長伝	鎮西の聖光房弁長は、筑前加月庄の人なり…
		2 選択集附与	翌年建久九年の春上人選択集を聖光房に…
		2 聖光問状	ついに学なり功をへて元久元年八月上旬…
		3 末代念仏手印	此ひしり安貞二年の冬肥後国往生院にして…
		4 聖光往生	筑後国山本の郷に一寺を建立して…
		5 聖光派勢観派合流	かの製作の念仏往生修行門云…
47	〃	1 証空伝	西山の善恵房証空は入道加賀権守…
		2 白木念仏	このひしりの意巧にて人の心得やすからむ…
		3 津戸入道	津の戸の三郎入道尊願不審なる事をは…
		4 証空往生	このひしりはことに恭敬修を専にして…
48	〃	1 空阿修行	法性寺の空阿弥陀仏はいつれの所の人と…
		2 法然書状	このひしり所労のとき日来の安心を…
		3 信実筆法然像	上人のつねの仰には源空は智徳をもて…
		4 空阿往生	毎年正月一日より七箇日の別行を勤修…
		5 念仏房伝	往生院の念仏房は叡山の住侶天台の学者なり…
		6 感西伝	真観房感西は十九歳にてはしめて上人の…
		7 金光房伝	石垣の金光房は上人称美の言を思ふに…
		8 結	上人の門弟そのかす侍しなかに…

（註）巻ごとの内容は島田修二郎「知恩院本法然上人行状絵図」（『日本絵巻物全集14』角川書店、昭和36年）に依り一部手を加えた。